

ねずみ魚

(上)

カナタ・ムメイ

稲田のきれいな郊外のはずれを流れる小川があった。鮮やかな赤と、青の羽毛を鏤めた野鳥が飛んできては小魚をさらっている。小川の兩岸は雑草にしては美しい植物が女の髪の毛のようにふさふさと豊かに茂っていた。小川の水質はとてもよく、澄んでいた。入道雲は川面に反映し、その背景のどこまでも深い、青い空をも反映し、流れによってマーブリングの模様のようになっていた。人影も流れで消し去り、この川はなにやら狂気を感じさせるほどであった。遠くの畑にはとても大きなもみじの樹が青々した葉を揺らし、畑の土色とそのままの鮮やかな緑色で見る者を幻惑していった。小川に人影があり、この人影も他に例外なく、川面のシルエットが飲み込んで、消し去っていた。彼は男である。先ほどから岸を歩きつづけていた。蜘蛛の仕掛けた、白くかほそい糸には、小魚が、川でジャンプした弾みで飛ばした水滴が付き、煌めいていた。それを彼はじっくり眺めていた。そして、再び歩き出した。橋が架かっているところで立ち止まる。橋の上をトラクターがのんきにゆっくりと動いていた。運転士は、彼に気付いて、トラクターを止めた。運転席から身を乗り出し、「おーい！そこで何やってんだよー」と叫んだ。そうすると、川縁にいた男が、手のひらを顔に近づけて、人さし指と中指で上唇を持ち上げ、前歯を声をかけた者に見えるように、強調した。目は空ろで、濁っており、充血していた。服は薄汚れていた。片方の手には、カナリア色の紙のバインダーを持っていた。

汗をかいて坂をあがり、町を見下ろせる場所に着く。銭湯の煙突から煙が立ちのぼっている。夕方だ。一呼吸して、坂を下っていく。坂の途中に団地がある。大きな団地ではなく、アパートくらいの団地で、三階建てである。側面には各階ごとに丸い排水溝が開いてあり、汚水を垂れ流している。団地には中庭があり、剥き出しの土の庭で数多くの低木が植えられていた。庭を取り囲むように金網がめぐらされており、金網にはローン会社、家政婦紹介所、ボクシングジムの案内板が括り付けられているが、いずれも古いもので、たとえ連絡をとって見たところで、通じないであろう。というのも、錆びて、破れ、垂れ下がっており、電話番号はいまではありえない番号である。石垣が団地の土台を囲んでいた。雨が降れば、ナメクジがアルミの光沢に似た軌跡を描き、這いずり回ったあとの粘液を石垣に塗りこめる。石垣の隙間からは、名も知れぬ雑草が顔を出していた。

団地には独特の雰囲気があった。人が全く住んでいないようであり、静まりかえっていた。その団地内で好き勝手なことを、例えば壁をぶち壊したり、窓ガラスを蹴破ったり、そうしたことが許されるような気持にかられ、一人の男が、団地の入口に入っていった。

入口では、足音が反響していた。買ったての革靴である。踵を堅い皮のために靴擦れをおこして、ばんそうこうで被っていた。子供達がバイバイ、と大きな声で別れを告げあい、家路につく時間であった。

暗い廊下を歩いていく。すると一つの部屋に惹きつけられた。というのも、そのドアは鍵をかけ忘れていたらしく、半開きの状態であった。そっとそのドアを開けてみると、饅えた臭いがしたため男の部屋だと思い落胆した。それでも、中に入ってみるとことにした。何か中にあれば、そこで破壊する楽しみが見つかるというものだ。部屋を汚すことで気分が晴れるという思惑があった。汚すといっても、さまざま。あいにくペンキはない。もしあれば、ペンキで壁に卑猥な文句の一つでも書きなぐったり、小便をそこら中に撒き散らしてやったり、許すことができれば、大便の一つでも部屋の真中でもしてやってもいい。とにかく、この団地内を片端から使い物にならないようにしたくてしかたない気分で、一人で興奮が高まり、心臓が激しく動き、心拍数を上げた。仮にこの静まりかえった、隙だらけの団地の住人が帰って来たときの顔とやらを想像するだけで嬉しいのであった。いったいどんな顔をするのだろうか。

部屋は綺麗に保たれていた。タンスに、洋服は冬物と夏物に分けられて収納されており、引出しを開けてみるが頻繁に使うものを上段に入れており、ここの住人はかなり実用的な人間であることが想像された。白っぽいカーペットが敷かれていた。毛髪、埃の類は見受けられていなかった。そのことからして、潔癖症に近い性格の人間だと思った。きっと綺麗にしておくことで、今にも切れそうな細い神経の持ち主で、いったん切れたら、とことんまでだらしなくなるか、いっそう昂じて清潔さを保つようになることだろう。そう考えると、仕掛けたくなり、引出しを開けて小便と唾を吐きかけてやった。

安っぽいコンポがあった。CDは最近使ったものは積み上げられていた。その他のコレクションは棚にポータル別に分けられていた。少しの乱れも感じられなかった。そこが気に障った。

男の部屋はこの部屋に比べると乱雑さを極めていた。布団は引きっぱなしで、半年は経っている。本は読まない。雑誌をよく読むが、成人誌であり、えげつないものばかりで、一日をその想像の中で生活していた。その雑誌の刺激的な部分を切り抜いてスクラップにしておき、保存していた。それはかなりの量になっている。ゴミとして切りぬいた雑誌は、あたりはばからず、包み隠さず、平気で紐で縛り、ゴミ捨て場に捨てた。灰皿はシケモクがうずたかく積もっており、寝タバコをし、焦げた布団はそのままであった。空いた酒瓶が部屋中に転がっていた。酒はなんでもよかった。ジン、ウォッカ、ウイスキー、日本酒、ワイン、ビール、焼酎、なんでもよかった。酔いつぶれる前の一人で会話を楽しむ瞬間がなんともいえない。二日酔いで、会社を休んだとしても、その晩には酒をあおる生活であった。風呂には入らずに、ひどい体臭、ふけが毛髪にこびりつき、乱雑な生活が、このきちんとした、整理された、部屋に嫉妬を抱かせたし、この住み処の住人を自分と同じ境遇にしてやりたい気分になっていった。男の汚さは度を越していた。そんな生活から解放されたいかのように、男は近所をさまよい、徘徊していた。

住人は自炊をしないらしい。フライパン一つ無い。鍋も無かった。冷蔵庫を開けて見た。酒は無く、天然水があった。その水を一口飲んでみる。もしかしたら、この住人は太っていたため、水を飲むことで、夕食を抜いたりなどして、減量を試みているのかもしれない。もう一度タンスを開けて見た。服を一つ取り出してみる。Lサイズだ。おおよそ、背丈は男の身長よりも高く、体格はよからう。健康優良児で表彰された可能性もある。しかし、冷蔵庫にミルクが無いのが気になる。これだけの体格を維持するには、牛乳は必ず飲んでいないに違いない。服を放り投げて、再び冷蔵庫に向かう。確かに水しかない。卵、野菜も無い。男はポケットから、煙草を取り出すと、火をつけた。すーっと肺に送り込んで、この清潔な部屋を汚してみる。饅えた空気が脂臭くなる。饅えた空気は住人が男だからだろう。あぐらをかいて、部屋の間取りを見渡す。一部屋閉め切った襖で隠れている。おそらく寝室に使っていることだろう。開けてみる。

襖を開けると冷たい空気が居間に入りこんできた。敷居のところで、下に向かって階段があり、地下室に通じているようだ。タバコを放り投げてみる。階段をころころと、タバコは火種を散らしながら、落ちていった。「燃えちまえ」と男は言い放った。男は階段を降りていった。寒さは一段と増し、夏だというのに、冷たく、氷室のようだった。最後の段を降りると、右に向かって道が伸びていた。

上で音がした。住人が帰ってきたのだろう。急いで、階段を上がり、襖を閉じた。襖越しに音を聞く。何かの鍵をテーブルに置く金属音が聞こえる。

住人は歩いて、冷蔵庫に向かう。天然水を取りだし、水を飲む。そして、服が居間の中央にあることに気付く。住人はあたりを見渡す。首をかしげて、誰か来たことに気付いたらしく、とりあえず窓を開け、外を見る。

「誰かいるのか」と独り言のように呟く。

襖を隔てて、階段の上で男は黙って聞いている。住人は、居間にすわり、そのあと大の字に寝転んだ。

寝たのだろうか、音もしなくなったため、男はそう思った。仕事帰りなのかもしれない。仕事といえば、男は勤めをこころと変え、長続きがしなかった。人間関係がうまくいかなかったのだ。

「提案をしてくれ給え」と上司が会議、と言っても立派な会議ではない。誰も黙っている、男は、「この仕事は頭を使う仕事とは違います。単純労働、と言ってもいいですね。そんな仕事で、提案しても無駄ではないですか？そうは思いませんか」男は幾分腹立ちまぎれに、そう言った。すぐ感情的になる社員が、単純労働、という言葉に反発を覚えて、

「単純とはなんだ！こういう仕事だって、きちんと頭を使うんだぞ」目を見て、食って掛かってきた。そいつの目が魚の目に見えてきた。こんな仕事を続けていると、人間が死んだ魚みたいになるのだろう。次の日に、会社を辞めた。つまらないことで辞めてしまうのであった。いさかいが嫌いで、閉じこもりがちで、自分の提案に反発されるのが嫌いだったのだ。頭をいつもグリースで固めた、男だった。嫌な奴だった。

住人は、いまだに大の字になって居間にいる。男は寝てしまったに違いないと考え、それが、かなり長くなり、面倒になり、もう男は住人と直に話そうと考えた。話といっても、相手は警戒するにちがいない。警察を呼ばれてもしたら、困りものだ。襖を少し開けた。住人の顔を見ようとしたが、腰から下が見えただけであった。住人は、ズボンに手を入れ、手を動かしている。いったい、いつになったら、この住人は動き出すのであろうか？だんだん足がしびれ始めた。タバコも吸いたくなってきた。もし、タバコを吸ったら住人は気付くに違いない、だが居間のタバコの匂いに気付かないくらいなのだから、もしかしたら喫煙者なのかもしれない、それとも匂いといった事柄に関心を寄せないのかもしれない。

住人は急に立ち上がった。男は驚いて、隙間の空いた襖の陰に身を隠して耳をそばだてた。その音楽が男にとっては苦痛そのものであった。クラシックなのであった。

クラシックに関して男は嫌な思い出があった。それは、クラスメートが音楽の時間に壁に貼られたバッハの肖像画にいたずら書きをした。バッハの口に黒いマジックで男性自身を書いたのであった。そいつはやたらにそれに拘っており、黒板にも書いたし、友人のノートにも書いた。そのたびに教師に叱られた。音楽の教師は少し感情的な人物であって、そいつがいたずら書きをしたのを誰かが言ったらしく、その教師はそいつをロッカーに閉じ込め、縄跳びの縄でロッカーをぐるぐる巻きにした。そいつはロッカーの暗闇の中でせせら笑っていた。皆は縄でまかれた笑うロッカーを取り囲んで、苦笑いをした。結局担任が出てきて、ロッカーの縄跳びを解いた。その音楽教師が、あるとき、おれが誰もいない音楽室のピアノを乱雑に弾いていたのを目撃し、「このピアノはおまえのおさんの給料よりも高いのだ！」俺は頭にきてその音楽教師をぼこぼこに殴った。すると、両親が呼ばれ、停学になった。その音楽教師とは卒業まで一言も口を利かなかった。そいつに限らず、音楽の授業といえば、クラシックとなっているわけで、授業のときに必ずその音楽教師は、モーツァルトをレコードでかけつづけた。こいつは一流のピアニストになれない、挫折した、薄ら馬鹿な人間だ、そんな人間が好むクラシックなんかは、俺は今後、一切聴いたりしまい、と心に刻み込み、卒業の文集で、芸術なんかこの学校にありゃしまい、駄目なハナクソ学校め、と書いたら、担任から苦情が出たので、仕方なく、おれは孤独で、逆境に強い、と書いた。

俺が、昔話を回想していると、襖が開けられ、住人は身を引くように驚いた。

「誰ですか、あなたは！」

「誰、って、迷い込んだ野良猫だ」

「住居侵入で交番に行きましょう」

「おまえが動かせるならね、こう見えても俺は腕力には自信がある、漬物石を軽々持ち上げ、この漬物石というのは俺の婆さんがぎっくり腰になったいわくつきのものさ、それをそうだな、三十キロくらいはあったね、上げた。」

住人は何か吹っ切れたような顔つきになった。それが、なぜか男は分からなく、ただ、急に打ち解けたように話し出し、終いには、居間で冷たいミネラルウォーターを頂戴するまでになり、そこで、住人は、地下室があると、自慢したのだが、男は、こいつは時間をさかのぼって説明しなくてはならない、いまどき核シェルターなど作っている奴などいまい。核戦争が勃発しそうな時代に作った核シェルターなどは、今では浄化槽に変化したか、娘のピアノの練習室に改造したか、そのくらいのもんだろう。それを、こいつは何をそんなに恐れているのか、盛んに、核シェルターの必要性を訴えていた。そのため、そんな大切なものならば、案内してくれと、言ってみた。男は地下室の核シェルターを破壊してやろうと考えたためだ。

いつだったか、後生大事に自分の全財産をデパートの手提げ袋に入れた浮浪者を殴ってやったことがあったが、あの浮浪者、今じゃ何しているんだろうか。

「じゃ、核シェルターとやらを見させてもらえるかね」

「いいとも、きっと驚くよ、何でもありだからね、缶詰、乾パン、水、お茶、本、衣服、毛布、ベッド…。あ、そうだ、ラジオまであるからね」

住人は見知らぬ侵入者を地下室に案内した。確かに不可解である。一度も会ったことのない男を対話をし、秘密裏にこしらえた地下室を案内するからだ。

地下室は自家発電で電気を供給するらしい。自家発電用のオイルのドラム缶が積み上げられていた。しんと静まりかえっていた。ベッドが片隅にあり、天井は中庭に植えられている低木の根が垂れ下がっていた。

「これでも工夫はしているんだ」

「工夫？」

「そう、土が剥き出しにならないために板で周囲を固めているんだ。これで補強はできているはずなんだ」

「補強にしては軟すぎるね、放射能は地下にも来るだろうよ、木なんか信用できないね、俺ならコンクリートとそうだな鉄を使って分厚い壁にしてやるね」

「でもこれで満足なんだ」

「これで満足だって？信じられないね、核で被爆することを想定しているのならば、こんなつくりで満足していたら、死んじまうぜ」

ベルが鳴った。住人は、地下から出て行った。

そこで、俺はまず始めに自家発電機をぶち壊すことにした。乾パンの缶を開け、そのパンを粉々にし、自家発電機のオイルに混ぜた。これで、当分はあの住人はなぜ使えなくなったかを考え、困り果てるだろう。そして、意外な出費。

次に、土の侵入を防ぐという住人自慢の壁とやらは軟だったので、蹴りを入れひび割れすることに成功した。後は、じゃあじゃあ保存してある水を床に流しつづけることだ。次に本をびりびりに破いてオイルの中に浸す。それから、缶詰を速く腐敗させるために穴をあける。千枚通しなどなくて構わない、木を打

ち付けてある釘で穴を開けてやればすむことだ。

ベッドのスプリングを壊すために、マットレスを、乾パンの蓋で切り裂き、中のポリウレタンを引きちぎり、スプリングを伸ばした。そこまでくると、興奮は急に沈下してしまう。これで、破壊は完成した。

地下室で、男はベッドに横たわっていた。先ほど投げつけたタバコはもう煙が出ておらず、フィルターのみを残し、土の地面に転がっていた。ライターを取り出し、一服する。

天井からぶら下がる根っこがだんだん伸びてきたような気がする。ベッドに腰掛けて肺から、スーっと煙を出す。根っこは男の煙に誘われるように、首あたりまで伸びてきた。伸びる速度は速く、首に巻きつき始めた。根っこは、するすると男の首をまき始め、男の抵抗を無視し、鼻へと伸びてきた。根っこは鼻の穴あたりで、ちょうどゴキブリが周囲を探るかのように、用心深くふらふらしていた。焦点を決めたかのように穴を探り、侵入してきた。男は必死に抵抗した。吸いかけのタバコは転がり落ち、ベッドの上でもんどりうった。住人は、来客がきたらしく、しばらくの間来ない。あの太った男に助けを求めるなんて芸当ができるわけがない。



根っこは、さらに深く鼻の穴に入り込み、のどにその先端を覗かせていた。しばらくすると、根は体中に回りこみ、顔の表皮の下を這いずり回った。そのため、男の顔は変形し、静脈が浮かび上がった腕のように、顔はひどく醜くなり、身動きが取れなくなってしまった。

――畜生め、どうにかならねえか、動けなくなっちゃった…

ベッドに腰掛けたまま、天井から伸びてきた低木の根で絡まれた男はもうそれ以上何もできなかった。できることといえば、男のくせに鏡台のあるベッドから約一メートルほどの場所までの移動だ。根が体内を駆けずり回るため、痒みに似た感覚に襲われる。体は重くなり、動きが鈍くなった。それでも、鏡台までは行くことができた。鏡を見る。すると、顔は、見る見るうちに変化し、日本兵のようになり、皺が増えてしまった。男の年齢は、三十八歳である。それが、鏡を見る限り、六十の初老の兵隊になってしまった。一銭の硬貨をポケットに入れていそうな感じだ。

住人は、宅配便の人と話をしていた。注文販売しかしない水を頻繁に、取り寄せるため、宅配便の人とはもう顔なじみなのだ。

「誰かお客さんが来ているようですね」

「知らない人なんですけど、地下の、そう、核シェルターにいますよ。変わった人ですが、なかなか憎めない人です」

「いい鴨が来たというわけですね。それにしても、警戒心のない人というか…。」

「で、その人はずっと核シェルターにいるんですか？」

「いずれは移ることでしょう、上で待っていますから…」

宅配便の人はそうですね、といい、仕事に戻った。住人はダンボール箱を受け取った。中身を確認せずに、居間に雑に置くと、地下に行き、男の様子を見に行った。

「なんてむごい！ひどい姿ですね…いま、根っこを切り取ってあげましょう。その前に、なぜぼくの部屋に来たかを言ってもらいたいですね」

「いいか、今それどころではないんだ、わかるだろう、な、根っこを早く切り取って、早くもとの姿に戻してくれないか」

「それは依頼ですか、脅しですか？」

「おまえの対応によるね、ぐずぐずしていたら、脅しになることだろうし、手っ取り早く始末してくれるなら、こっちも紳士的になろう、さあ、早く、このいまいまい、根っこを切り取るんだ、さあ、早く！」

「いつまでもそうしたいのなら、こちらはこれから、あなたを案内しましょう、この上階で出迎えてくれる人が、まだ待っています、くつろぐことにはほかの人には負けないことでしょう、待っていていらする人では決してありません。どうです、一度会ってみませんか？」

男は、何度か、不自由な体を動かし、殴りかかろうと試みてはいるが、上からの根っこが邪魔をして、こぶしを住人の腹めがけて突こうとしても、根に絡まってしまった。

住人はポケットからカッターナイフを取り出して、すばやく根っこを切り取り、体から根っこを引き抜くと、男は皺だらけの顔になってしまった。それから、住人に手を引かれるまま、核シェルターを出た。

「いいですか、もう待つこと一時間、おそらく空腹なことでしょう、ですが、繰り返しますがそんなことではいらつかない人ですよ、安心してください」

「安心？」

「そうです、安心していいんです。あなたは横暴な人でしょうが、待っている人は非常に紳士的な人です、いや紳士です」

足はふらつき、住人の部屋から出てきた男は、もうすでに暗くなってあやしげにランプがともる廊下に歩み出た。住人はその廊下を男を連れて歩き出し、二階に通じる階段を上っていった。

二階にたどり着くと、男は弱弱しい口調で、

「おい、一服できないか」

と訊いた。住人は、表情一つ変えずに、

「これからお会いする人は喫煙者ですから会ったときにでも一服したらどうですか？」

「会う、会う、って一体なんでその男に俺が会わなきゃならないんだ、会社の面接じゃあるまいし、なぜかしこまって会わなきゃいけないんだ」

「あなたが私の部屋に侵入してきたからですよ、私の部屋に入ってきた人は全員、いまから会う人に話をしなくてはいけないことになっているのです。それが嫌なのでしたら、警察にでも行きましょうか？住居侵入で逮捕だなんてこともありますからね、それと器物損壊・・・核シェルターの備品を壊しましたしね」

「では訊くが、その男とおまえの関係はいったい何かね、たとえば父親みたいな存在だとか、信頼を寄せている人物だとか…」

「そのあなたが今会う人物は商人です。単なる商人ですよ。小さな店を細々と経営する商人です。計算高い男とお考えでしょうか？なら間違いですよ。素直で、正直で屋号に素直屋、正直屋とでもつけたいくらいです。先日の五百円玉変わりに韓国のウォンを使ったはやり病のような事件でもあの方は決して怒らずに、その被害額は十五万くらいでしたが、まあ仕方のないことよ、と言っただけのけたくらいです」

「何の店だ」

「八百屋とタバコ屋を兼ねている店です。その方のお母様は生前タバコ屋を経営していたのですが、病でお亡くなりになられて、タバコのほうは自動販売機に代わりまして、八百屋がもっぱら主体となって現在にいたるのです。八百屋のほうですが、品質もよく、評判のいい店ですよ。その方のお人柄なんですよ。そう、まるで冬のお日様のような存在であります。あのお方は！」

暗い二階の廊下では、蒸し暑さの中、その人物に酔いしれて、上を向いていた隙に、手首を振りほどいて一階へと逃げ出した。

階段は短かった。おい、という住人の凶暴な声がした。階段を下りる音はただ一人の男だけで、住人が追っては来なかった。

男の脇の下、背中、耳の裏には汗が絞るタオルのように吹きだし、息苦しい呼吸をして一階にたどり着くと、そこには、子供たちがカゴメカゴメをしていた。

「おい、ガキどもそこをどかねえか！」男はすごんだ。子供たちはうつむいてじっとしている。

一人の男の子を男はつかみあげた。そして、脇を抱えてどかそうとしたが、なぜか顔を上げない。無理やりに顔を片手で持ち上げた。顔は漆喰で塗りこめられた白い壁のように、目も、鼻も口も、眉も何もなく、頭髮だけはあった。その男の子は声を出した。

「おじさんどこへ行くの？」

男は顔のない子供に一瞬驚いた。しかし、そのころには子供たちが男の体につかみかかってきており、一斉に同じ質問をした。

「おじさんどこへ行くの？」

「ねえ、どこへ行くの？」



男は無言のまま、外に出ようとした。子供たちは絡み付いてきてなかなか離れない。まるで、男が外に出るのを妨害しているかのようであった。男は子供が体のわりにレスラーのような力があることに気付いた。そして、男はこの団地に入り込んだことがそもそも間違えであったこと、そして、この連中は確実に自分を二階の八百屋に連れて行くに違いない、と思った。後悔とも言えず、自分がたとえ力づくでもこの子供を振りほどいて出て行こうとしても、いつかはこの団地に引きずり込まれる、そんな気持ちがしてきた。そのとき、男はなぜこの団地に入り込んだのかを回想していた。破壊してやろう、という気がして入り込んだことは確かだが、鳥もちに絡まれた蛾のようで、団地から出してもらえないのがいっそう不自由さを身にしみてきた。

子供たちは男を横にして、二階へ連れて行った。男はもちろん抵抗をしたが、数人で暴れまわる男を押さえ込んだ。男の抵抗は無駄であった。二階に連れて行く途中でもカゴメカゴメを歌いつづけていた。

二階では、住人が手もみをして待っていた。先ほどの凶暴な、「おい」という声を発したとはいえないくらい穏やかさで、丁寧に迎え入れた。

「さあ、良い子達だね、そのままあの部屋に連れて行ってくれるかね」

住人は、子供たちに話すと、子供たちは無言のまま初老の男を連れて行った。天井はあまり明るさがない電球が皆を照らし、廊下は薄暗かった。

なぜ、こんなに落ち着いているんだ、これからどうなるのか不安じゃないのか？いったいこいつらは俺をどこに案内しようとしているんだ、それは八百屋だが、その八百屋に会わせていったいなんだというんだ。まったく、この団地に惹きつけられた俺の油断が仇となったわけだが、あの住人が今では、顔なし子供を従えて、この俺様を八百屋に合わせようというのだ。ここは、静かにしてその八百屋とやりに会ってみようではないか。

一行は何もしゃべることなく、ある小部屋に向かっていった。そのドアの手前に立ち、住人はノックをした。ノックには、何の反応もなく、住人はノブを回してドアを開けた。開けたドアからは、熱風が窓であろうか、そこからドアに向かって流れてきて、一行を撫でた。

「おじちゃんもう僕たち帰っていいかな、あの、お腹がすいちゃったんだ、ラーメンが食べたいな、夕飯はなんだろう、お魚だと嫌なんだけど…」

口のないうちがどこから発声するのか、言葉となって、住人に伝わった。

「ご苦労さん、ありがとう、家に帰ってたくさん食べなさい」

抱えていた男を放り投げて、子供たちは引き上げ、立ち上がり、逃げ出そうと考えてみたものの、子供たちが完全に消え去るまでは逃げても同じことだと思った。それならば、先ほどの考えていたように、八百屋に出会ってみたいのではないかと思った。

住人は初老の男を狭い空間で、捜せば分かるというくらいの小部屋を案内した。台所、トイレ、風呂場、寝室、そして、窓ぎわに椅子があることを教えた。そして、その窓から中空に幅の広い厚い板が伸びていた。

「さあ、この先です。この椅子を持っていくといいでしょう、そんなに心配しなくていいですよ、凶暴な声が気になりましたか？あれは、あまりにもとっぴな行動をあなたがとったからです、ついあのような声を張り上げてしまいました。すいません」

「で、その八百屋はどこにいるんだ」

「あなたもせっかちな人ですね、八百屋に会うことを決めたのでしょうか、さっきそう思ったでしょう」

「心が読めるのか？」

「ええ」

「この先です。」と窓の先を指差した。そして「お客さんですよ」と、声を出した。

板の先に椅子を乗せ、そこに座る八百屋ははじめて顔を正面にして、目を開いた。鋭さの無い、精悍な感じもしない、浅黒い男であった。ただ、太陽が沈みかけた暗さのためにそう見えたのかもしれない。生暖かい風が吹いていた。

「ああ、お待ちしていました。どうぞその椅子を持ってこの板の上に乗ってきてください。」

男は、椅子を持って板の上に上がっていった。住人が、怖くないですか、と聞いてきたので、何をいまさらと言いつつ放った。男は、この椅子を八百屋めがけて投げつけることで、事態が一変するのではないだろうか、と思ったが、住人から逃れるときのように、壁の顔した子供たちが、階下では待ち構えているかもしれない、と考え、八百屋に従った。八百屋は、住人に向かって、声をかけた。

「ご苦労さん、もういいですよ」

住人は、本当に、こんな送り届けるだけの仕事でいいのだろうか、と思ったが、帰った。核シェルターが気になっていたためでもある。

「聞かせてもらいたいんだが、なぜこの団地に入り込んだんだね」と八百屋は腕組みをして尋ねた。

「破壊ですよ、俺の悪い癖で、なんでも人の持ち物は破壊したくて仕方がないんだ」

「だとすると、犯罪者に入るね、そろそろその悪い癖を払いのけなくてはならないね、もう見たところ四十に差し掛かる年頃らしい、少年ならわけがわからないわけでもないがね、その年じゃみっともないことだね、これから手紙を読んでみる、君宛にきたものだ静かに聞いてくれると助かるのだが…」

男はそんなことより、この根っこが入り込んだせいで、顔が老人のものになってしまったことを訴えて、どこか病院を探してくれないだろうか、と、しきりに言った。その訴えに耳をかさず、封筒を内ポケットから取り出した。茶封筒で、しなびていた。やがて、本文を朗読しはじめた。

「何をその手紙が言っているのか俺にはわけがわからねえ。第一、そいつが誰だか俺は知らない。おまえに来た手紙じゃないのか」

八百屋は、手紙を読み上げ、手紙をきちんと畳んで丁寧に茶封筒に入れると、男に投げてよこした。男は手紙を受け取らなかったため、茶封筒は下に向かって風になびいて落ちていった。

「あまり意固地になると、もっとひどい目に会うかもしれないですよ。迷い込んだのなら、こんな目には遭うはずがないでしょうが…何か、こう、運命だという気がしませんか」

「運命だって？冗談じゃない、俺はつい、ふらふらしていく癖のようなものが、安酒をかくらっていると、どうしてもこうなっちゃうんだ、この前も、短大の女子寮に迷い込んで、ひどい目に遭ったんだ」

「だから、もうそろそろその変な行動もお止めになるといいから、こうして切符をある人が送ってよこしたんだよ、分かるだろうが…もちろんあなたにとってこうして一生過ごす気はもちろんないでしょうがね、いつかは身を固めなくてはならないでしょうが、結婚とかではないよ、それはもっともっと先の話だ、それ以前に、あなたの存在をしっかりとしたものにする必要があるでしょう、どうです、切符受け取ってくださいませんか」

「いいかい、八百屋さんとやら、こっちとしてはどうでもいいことなんだ、存在をしっかりとしようがしまいがそれはどうでもいいことなんだ、他所さまからとやかく言われたくはないね、それに、なんだね正装なんかして、説教ならごめんこうむりたいね」

八百屋は、少ししてから、話し始めた。それは、説得というより、穏やかな命令のようなものだった。

「切符を持ってある町まで行ってほしい、そこで運河を渡り、冷凍食品の倉庫に行くといい、それで分かるから…さ、その中庭の穴から運河に！」

八百屋は、立ち上がって、男に近づき、切符を男に手渡した。

「ちえ、こんな切符がいったいなんだってんだい？」

「そのうち分かることだよ、さ、この切符を持って運河に行きなさい。知っているところだよ、浜松町からモノレールに乗り換えてすぐだ。場所を知ることは簡単だろう、そんな面をして、知りませんとは、幼稚園の子が笑うね」

男は、切符を握り締めて、このまま八百屋に言われたとおりに行ってみるか、いや、そもそも、こんな馬鹿げた話に乗るほうが、おかしいというものが、いろいろ考えてみた。もし条件を飲まなかったなら、俺は、今までと同じようにふらふらして、不安定な生活をしつづけるのだろうか、それともこの切符の話ののってやり直すか。

こうしたさまざまな考えが錯綜しているときに八百屋はこう言った。

「もし運河に行かなかったなら、その初老面を下げて、今まで以上に、情けない生活を強られるかもしれない。そのことは不利だし、手紙をよこしてくれた人に、申し訳のないことだ、思いつめず、さっさと行動に移したらどうだろうか、さ、行くんだ！」

八百屋が見送り、部屋を後にし、庭に出て、穴蔵に入り込んでいった。そこは、湿気と生臭さが、空気に混ざっていて、暗く、寂しいところだった。穴の中で、右往左往していると、出口があり、街角に出た。

街灯がともり、夜だというのに、油蟬が、オレンジからジュースを搾り出すようにして、鳴き声を搾り出していた。

駐車場があった。駅は、列車の音が近くでするため、すぐ傍だと思っただが、どの道を進んでも袋小路になっていた。壁が邪魔をし、民家が塞ぎ、民家の中にいったん入って、民家の裏から出してもらい、囲いを超えて、駅に入れる感じだ。

そこで、男は、列車の音がして、上空を明るく、照らし出している場所に、見当をつけると、ある民家の後ろに駅がありそうだとわかり、そのせりだした民家に入ろうとした。ブザーを鳴らした。

老夫婦が顔を出した。普通は老女が出てくるか、息子がでてくるものではないかと思ったが、二人そろって玄関に出てきた。番の鳥のようにしていた。老夫婦は愛想よく対応してくれて、男が、駅に行きたいと、言うと、家に上げてくれた。

男は、やたらに低い天井の居間兼食堂に入り、ちゃぶ台で、茶漬を啜る中年男を、チラッと見て、そのまま老夫婦の案内に従って、後をついていった。暗い部屋であった。その奥は、台所になっていて、台所の窓の中央を線路が横切っていた。

「これじゃ騒音で眠れないだろうが」と男が老女に言うと、

「まあ、なんて口の利きかたをするのでしょうか！もう少しやさしく言ってもらえないでしょうかね、失礼な人だこと！」と答えた。

老夫婦の夫は六十後半というところだろうか、皺はタバコで燻されてできたスモーキーフェイス、というところだ、彼は黙ったままであった。それとなく指を見ると、左手の人差し指、中指の第一関節が、ヤニで黄色く変色していた。

黙っているものだから、男は自分の意見に同意してくれているのかと思った。窓はきしきし音を立てて、開いた。老女が、

「さっさとお行き！その線路を走り抜いたらホームに出るわよ、さあ、ぐずぐずしていないで、お行き！」

と言って、糠だるから取り出したキュウリを投げつけた。男は糠をつけて、そのまま老夫婦に尻を押されながら、しぶしぶ線路に出た。そして、よろけて、ホームに上がった。

それから、駅前に出たのである。ホームから、直接列車に乗ればいいものの、男はなぜだか切符を使わなくてはならない気がし、何かこの駅前の喧騒がもう最後の光景になる気がしたからであった。そのため彼は、駅前に出た。居酒屋から出てきた酔ったサラリーマンが終電でもないのに千鳥足で慌しくホームに向かっていった。飲みすぎでもどした青年が一人。紅潮した顔のものがたくさんいた。キスをするカップル。男は振り返り、改札を通過した。

列車内は静けさと騒がしさが混合され、それらが形を成したように人々がひしめき合っていた。若者は大騒ぎをして、つり革にぶら下がってサルの物まねをしていた。すりが酔客を選んでいた。項垂れている人、まるでごみを乗せているようだった。浜松町に行くには、乗換えをしなくてはならない。また数多くの人間に出会わなくてはならないのか…男はまるで世捨て人のようになった自分に気付くと同時に、自分もこのごみの一部かもしれないと考えた。ただ違うことは彼らは社会に所属していること、自分は所属していないこと、ここが大きな違いだと考えていた。

列車の窓の外にはネオンが誘ってくるかのように発光していた。街中が淫らで、ふしだらに男には思えてきた。前にはそんなことはなかった。

男は列車内で一人演歌を口ずさんだ。列車がホームに止まる。車窓に古びた住宅の物干しが見える。既に湿気で萎びたブラジャーと男物のトランク、白いレースのカーテンの奥で男がテレビを見ていた。女はどこにいる？台所で洗物でもしているのであろうか。風呂につかっているのか。彼らも所属しているタイプの人間だ。自分はこれから冷凍倉庫に行かなくてはならない。八百屋は自分が不安定で、所属していない人間であることを知っていたのであろう。それにしても、あの団地は不可解であった。しかし、戻れない気がしてきた。無論あのようなところに戻る気などないが。男は、顔の皺を引っ張り、抓くったりしてみたり、無造作に伸びた髪の毛を手ぐしでかきあげたりしていた。まだ六十の日本兵なのだろうか？車窓に顔を映してみると、かなり老け込んだ顔である。水滴が窓にあたってきた。雨だ。

浜松町についたのが九時ごろであった。プラットホームに男は立ち、遠くからやってくる列車をしばらく見ているがモノレールに早く乗らなくてはならないと考えて乗り換えすることにした。

モノレールに乗り、指定された駅についた。雨は本降りになり、静まり返った駅には、誰もいなかった。目指す運河は男は分からないので、適当に歩いてみることにした。潮の香りが手がかりだ。しかし、この雨では臭覚がきかないことだろう。殺風景なところだった。三十分歩いたのだろうか、帰巢本能みたいなものがきいたのか橋に辿り着いた。橋の先はただトラックが通る大きな通りがまっすぐ伸びていた。橋の欄干からのぞくと、薄暗い運河の片側は草むらで、反対側は倉庫が並んでいる。倉庫のほうに男は足を運んだ。

雨が土砂降りになり、その中で顔をこすりながら倉庫前の看板を見る。建築鋼材の倉庫。食品の倉庫。缶詰の倉庫。冷凍倉庫はその隣にあった。シャッターの下りた、トラックの出入りがある大きな入り口の隣に小さな入り口があり、明かりが滲んで灯っている。そのドアに張り紙があり、それは短い文章で、「お客さまどうぞ遠慮なさらずに、上階にあがりくださいませ」とあった。ドアは鍵がかかっておらず、開けると男は階段を上がっていった。もう既にずぶ濡れであった。

上階は事務所らしきものがあり、その隣は何に使うか知らないが、とても小さな細長いドアがあった。「仮眠室」とあったから、深夜まで働く人がいるのかと思った。それにしても誰もいなかった。タオルを探す必要がある。事務所に入ってみた。机が数こそ少ないがあり、電気をつけてみた。書類の類しかないのが分かったので、そこを後にして、更衣室を探すことにした。廊下を歩き、部屋は全てで三つしかないのが分かった。一番広いのは会議室であった。タバコの残り香があった。更衣室は会議室の向かい側にあった。そこに入り、ロッカーをあたりかまわずに開けていった。だらしのないロッカー、空のロッカー、そこでも収獲はなかった。しかたなく、そこも後にした。残るは給湯室だ。冷蔵庫にタオルが、正確に言えば手ぬぐいがかかっていたので、それで、男は体を拭いて、お茶を探し、お茶を飲んだ。それから一服した。湿気たタバコは片側だけ焼けていくというぶざまなタバコになった。それにおいしくなかった。乾燥が一番良いし、それに外で新鮮な空気ですうほうがうまいのだ。これは前に勤めていた職場の人が教えてくれたことだ。

美味しくないとタバコを吸い終わると、仮眠室に向かって明朝この責任者と会えばいいのではないかと考え眠ることにした。仮眠室に入るが、誰も眠ってなどおらずに、ただまるでこの俺だけのために設けられた部屋のように布団が敷いてあった。とりあえず布団に横になるが枕元に小さな窓があり、そこから運河を見ることができるのであり、湿った磯の香りが漂ってきて、よほど疲れてしまったのであろう気温が高いにもかかわらず眠ってしまった。

起床すると、体が動かなかった。まるで瞬間接着剤で固定されたような、標本の昆虫のように動かなかった。仰向けの状態で、歯が痒かった。しばらくすると、足元に誰かが来たような気がした。動かない体で、足元を見ようと試みたが、頭まで固定され、天井しか見えなかった。畳の部屋であつたらしく、するすると誰かが歩いて、枕もとまでくるようだ。それは着物を着た女だった。足袋の擦れる音がしたのであり、足に感触があったのは、着物の裾であった。その女は口で何か呪文のようなものを唱えていて気味が悪かった。男には顔が見えなかったが、ここでいったい何が起こるのか不安になったと同時に、若い女であるならば、押し倒して性交渉の一つでもしてみたらどうだろうかとも考えた。女は、その考えを、気持ちを察したのであろうか、ふと男の顔の上に顔を接近させた。長い髪は乱れて顔は見ることができなかつた。オー、オー、という奇声を女は発し、男は怖くなった。その奇声はやむことを知らず、男が動けないものだから女は男の両方の頬をわしづかみにして、皺を伸ばし、粘土を捏ねるようにして、顔を変形させていった。女は奇声をあげつづけて、男の顔は粘土のようにくしゃくしゃになり、体も変形していった。しばらくのあいだ何が起こったのか男には分からなかった。気付くと、男は歯だけが大きな魚になった。ネズミのような魚はぴちぴちと体をくねらせ、それは自由を求めて、枕元の小さな窓から運河に飛び出していった。

ネズミ魚の思考はもともと人間の思考と変わりがないため肺呼吸をする。そのため、水中から飛び出し、打ち上げられたとしてもしばらくのあいだは生きていくことができる。陸上で生活ができないで、魚類となっているのはその皮膚にある。その皮膚は陸上を照りつける日光に弱く、紫外線があたるとやけどをしてしまうくらいに弱かった。ネズミ魚は脳容量が小さいにもかかわらず、人間と同等の思考が可能だ。体長三十センチではあるが、その歯は鋭く、サメのように三角形ではなかつたが、サンゴは噛み砕くくらいの筋力が両あごにあり、厚さが薄いのではあるがカッターナイフのような鋭さであった。運河に入り込みしばらく泳いだ。頭の中で演歌が流れている。発声はできないものの、喉の声帯を震わせることはできた。声帯が微妙に動くために発声ができない。ネズミ魚にとって発声など役には立たないのである。

あれはいつだったのか忘れてしまったが、初めて成人誌を買ったときであった。今ではめったに、というよりも田舎にはあることはあるが、自動販売機があった。友人を連れて行き、なけなしの小遣いを貯めておいて、夕方、人々の往来がなくなったところを見計らって、コインを投入した。早く出てこなくては誰かがくる、その一方で早く中身を見てみたい気がして、心臓がどきどきした。甲高い警告音のような音とともに成人誌が出てきた。それをTシャツの中に入れて急いで、部屋に友人と戻った。そのころは、今のように薄汚れていなかったから、部屋も清潔であったし、身だしなみもきちんとしていた。そこで、友人と教科書を見るときに使うエネルギーをそちらに注げば良いくらいに一生懸命舐めるように、その一方で罪悪感に苛まれつつ、一ページ、一ページを、じっくり鑑賞していった。当時は、手淫など知らなかったが、勃起はした。それが自分の内側から沸き起こり、なぜそうなるのかがわからなかった。怖くなり、ページを閉じ、公園のごみ箱に捨てた…。

ネズミ魚は泳ぎつづけた。筋力は泳ぐことに適応していた。それがなぜ、あの女に変形させられて、すぐにでも、泳ぐことに適応できるのか、ネズミ魚は不思議に思った。ヘドロが運河のそこに蓄積されており、蟹、貝が白い染みのようにいた。深夜の遊泳はそんなに悪くはない、そもそも魚というのは泳ぎながら、眠ることができる。

橋にある街灯が、水面に反射して、ぎらぎらと輝いていた。時折、左右に分割された奇妙な目玉で、尾を覗いてみると、街灯に反映して、きらきらと、鱗が光った。

濁った運河で、金目のものを探すならば、金を追いかけるよりも、この魚が、発する輝きに、いつの間にか気を囚われてしまうだろう。それが、ネズミ魚の一種の宿命でもあった。その輝きのために、いずれは捕まえられてしまう。そして、こ汚いアパートの一室の、狭苦しい水槽の中で、うまくもない餌を与えられて、一生を過ごすのだ。

ネズミ魚の特徴は、二本の前歯が、口から飛び出している。ネズミの歯に似ている。ネズミは哺乳類で、陸上で生活するが、ネズミ魚は、陸上の渴きを嫌って、水中生活を選んだ。

ネズミ魚の食物は、プランクトンである。他の魚、貝、海藻を食べるこはしない。前歯が邪魔になるために、プランクトンという食物を選択したのだろう。

ネズミ魚には鋭いナイフのような、武器のようなあまり意味をなさない前歯がある理由は、外敵からの護身のためだが、ネズミというほ乳類の名残りでもあった。

プランクトンを獲得するには、水も一緒に、取り込まなくてはならない。プランクトンを取り込んで、余分な水分を、えらから、吐き出す。この単調な、一連の行為を繰り返すうちに、ネズミ魚はこの魚になる前の生活を回想し始めた。

穢れ始めたのは、成人式のころからだろうか、自治体で開催する成人式には出席しなかった。全くばかげた儀式だと思ったからだ。

喫茶店で、偶然、成人式が終わって、数ヶ月経た後に、数少ない友人と出会ったときに、友人は、出席したかどうか、訊いてきた。

男は、馬鹿らしいから出席などしない、出席した連中の中で、成人したことを意識している奴らなど、どれだけいるだろうか、と言った。友人は、穏やかな顔つきだった。

「みんな来ていて、楽しかったよ、来ればよかったのに」

「そこが嫌いなんだ、それでは成人式でなく同窓会ではないか」



「同窓会みたいなものだけど、みんなが集まる機会などないじゃないか、今なにやってんの？」

「単純労働だよ、くだらないつまらない仕事だよ」

「今、俺、大学に通っているんだ、三流大学だけど…」と友人は、昔から変わらない、何の優越感もなく、何の僻みもない、控えめな返事をしたつもりであったが、男には、それが自慢のように聞こえた。

「大学か…、遊びほうけて、さぞかし楽しめよ」

「おまえ、昔からそんな考えしてきたのか？まるで僻んでみているみたいだぞ。俺は、大学に遊びに行っているわけじゃないんだ、勉強というか、まあ、基礎的な知識を身につけて、大学院に行って研究をするつもりなんだ。専攻は…」

「そんな、勉強に使うゆとりなど、今のおれには、ないね、羨ましいことだね」

友人は、紅茶を飲んだ。男は、スパゲティーを平らげた。

「何かあったのか？」

「別に…」

「相談ならのるよ。まあ、頼りないかもしれないがね。それにしても、その僻みは、なんとかならないか？仕事を選択しても、勉強を選択しても、どちらが偉い、ということはないんだ」

「それは、大学に行っているから言えることだね、俺は、毎日、仕事に行って、くたくたになって帰ると、もうくたびれて、布団の中だ、起きると、仕事だ、その連続だ。それで一生が終わるんだ、おまえのように、金があるわけじゃないし、勉強が嫌いだから、大学にいくつもりもない」

「仕事を変えることはしないのか？」

「当分は今の仕事になるだろうよ、家賃を払って、食費を搾り出して、電気、ガス金はどんどん出て行く。いいよな、大学生は、アルバイトをすりゃ、それがそのまま自分の小遣いになるんだから…」

友人と別れて、男はヘルスに行った。そこで奉仕をしてもらい、家に帰った。酒があったから、それを飲み干す明け方近くまで、深夜番組を見ながら過ごした。部屋は乱雑さを極め始めた。

ネズミ魚は水面に上がっていき、呼吸をした。これで一時間は水中にすることができる。体長が鯨くらいあるならまだしも、鯔くらいの大きさなので、肺に入れることができる空気は、限られている。外界は夜明け間近であった。

ネズミ魚は、海へと泳いで行った。淡水では満足できなかった。もともと海に住む生き物であったから、自然な流れでもある。他の魚にはめったに会わなかった。ただ会ったのは、鱗が剥げ落ちた、死にかけているボラだった。

ボラと会話ができるか考えたが、自分は、人間の思考を持っているために、魚類が、どのようなコンタクトをとっているのか分からない。ひとまず、その死に瀕している、魚類の一生を、全うしつつあるボラに近づいて行くことにした。

ボラは警戒色を露骨に表していたが、体が、いうことをきかないため、潮の流れに身を任せたまま、ネズミ魚の接近を不快に思いつつもこれが最後の接触を持った生き物になるのであろうと、思い、身をゆだねた。ネズミ魚は、ぼろぼろの魚の周りを回ってみせた。ボラにとって、これほど嫌なことはない。ボラは、ネズミ魚の鼻先を小突いてみせた。

老いぼれ爺さんにしては、なかなかやるではないかと、ネズミ魚は思い、声帯を震わせた。

ボラは、その声帯から発する、水中の音波には、何も反応を示さなかった。ただ、ひたすら、回りつづけるこの不快な魚を追い払い、一匹、水底に身を横たえ、内臓が腐敗し、ガスが発生し、浮き袋が自由になって、水面に浮かぶのを待っていた。

—爺さんもう死を覚悟しているんだろ、だったら、この海について語ってくれないか？

男の母親はとっくに死んでしまっていた。男が高校生のときに脳の血管が切れ死んだ。医師から死を宣告されると、当時、高校生だった男は、父親の顔を見た。父は口を一文字に結び、何日も食事をしていない、やつれた顔つきで、これからは、父さんとおまえだけしかいないんだ、と呟いた。そんなことは分かっていることだと、男は思い、なぜ、そんなことしか話せないのか分からなかった。病院の霊安室は、地下二階にあった。母親の姿を見て、男は蠟人形のようなどしと思わなかった。涙を見せなかったのは、母親が、家にいなかったことが、多かったからで、父とは、話はしたが、母とは、思春期に入ってから、口を利いたことがなかった。母は、別の男と接触しているのを、父は、黙認していた。父の片目は義眼であった。母は、その目を嫌い、一緒に食事もできない、とまで言った。

母親にたいしての幼いときの記憶は、男は持ち合わせていない。忘れてしまっていた。何かの拍子に飛び出してくるかもしれない。父親に対しての記憶は、鮮やかによみがえってくる。それは目の手術のときだった。そこには母がいたが、母がどのような服装をして、何を話していたか、どんな表情をしていたのか、その辺がはっきりしない。

父は事故で片目を失ってしまった。父は、その他にも、左手薬指の第一関節を失っていた。それも事故である。裁断の仕事をしていて、睡眠不足がたたりに、裁断機で指を落としたのであった。父にとり、この世は、自分の肉体を奪い去る、忌々しい世界に映ったかもしれない。そのうち、肉体を維持していく精神までもを失いかねないと、危惧したかもしれない。父は、死を覚悟していたのだろうか。

父にとり、母親の死は、自分の死を身近に感じ取る瞬間であったかもしれない。自分から、あらゆるものが失われていき、自分は、それに対して、何も抵抗もできない。全てが、お膳立てされたシナリオのとおりに進んでいき、自分は、それに異議を申し立てるわけにもいかず、自分に生じたことを、何ら抵抗するわけでもなく、受け入れていく。母が死んだ今となっては自分よりも、息子を失うことを恐れていたことだろう。死などは、自分にとって、この世界からの離脱であり、不幸というよりも、むしろ幸福である。永遠に目覚めない死。死などというものは、突然、襲いかかり、細胞が死滅していく。その細胞が活性を失っていく中で、残りの細胞が、生前の記憶を、やさしく思い起こしつづけるだけなのかもしれない。

ボラは、もう既に泳ぎを止めていた。流れに身を任せていた。そのボラに向かって、ネズミ魚は、鼻先を向けて、突いてみた。ボラは、何ら抵抗を見せるわけでもなく、反撃にもでなかった。ネズミ魚は、そのボラが、もう既に生きることをあきらめていることに気付くと、ボラを見捨て、泳ぎつづけていった。

そのボラを放置して、ネズミ魚は泳ぎつづけた。夜中の運河は静かだった。自転車が底に、ヘドロにまみれて、横たわっていた。もちろん視界は、さほどよくない。

運河を下り、海へと出たとき、浸透圧の関係で、体を慣らすのに時間がかかったものの、海の塩分の濃度に慣れ、死にかけたボラに、心残りがあったものの、更に泳ぎつづけていると、海流の関係で、浜に打ち上げられてしまった。肺呼吸ができるため、苦痛を感じはしなかったが、胸鰭、背鰭、尾をつかったり、体を横にねじり、四苦八苦をして、どうにか海へ戻ろうとした。朝にでもなれば、散歩がてら、この魚を弄繰り回す子供の一人や二人が、来るに違いないからであった。事実浜辺に、朝焼けを見るための自動車が道路に止めてある。中で何が行われているかは、なんとなくわかる。

どうにか打ち寄せる波に、体を持っていくことだけはできた。潮にのまれ、あとは沖へと流れていくだけだ。空腹を感じて、海草を食べようとするが、なかなかうまくいかない。他の獲物を狙ってみてもいいが、すばしっこくて、捕まらない。

こうした海草や、他の魚に、未練があるのは、まだ人間であったころの記憶のせいだろう。陸にいるネズ

ミは雑食であろうが、ネズミ魚の場合プランクトンが主食のため、こうした食物は口にできない。

あれは俺が、まだ若く、就職する前であった。就職というものを経験したことはない。職を転々と変えていったため、本格的な就職などしたことがない。そのため、親類からは、落伍者の意味合いで、接してこられたものだった。親類の中には、こうした落伍者を、どうにか一人前にしようという者は、いなかった。腫れ物にでも触るかのように接してきたし、あるいは、からかいの対象、酒の入った場では、いっそう、あからさまになったものだった。むろん経済力がなかったから結婚など親類は考えてはくれなかった。一時期は結婚も悪くはない、と考えたりしたがそのうち年齢がそれを許さなかった。世の中には高齢でも結婚している人々はあるだろうが、俺はどうもいやだった。重荷になるといった考えが芽生え始めたからだろう。

ベッドメイキングの仕事をしていて、一流ホテルではなく、場末のラブホテルの仕事だったから、人間の汚い面をシーツは示していた。仕事を続けていくうちに、酒を飲み、タバコを吸い、そして、人間というやつは、表と裏を持ち合わせていて、それを巧みに使い分ける。紳士面をしていたとしても、やることは動物並だ。そんなことを思いつづけていくうちに、自分もそれと変わりはなく、ただ、そのような心の汚わいが、次第に、外へと発散していき、まず手始めに、公衆便所を壊していった。自販機を壊していった。そのうちに、慣れが生じてきたのか、他人の家に侵入していき、破壊していった。

ネズミ魚は、沖へと流れていった。

沖には一隻の漁船が停留していた。もう既に漁は終わり、漁師は、船上で一服していた。朝焼けで、彼らの姿は明確には見えなかったが、疲労が感じとれた。ネズミ魚は、漁船に近づくことを恐れていた。というのも、捕まりでもしたら、日が昇ったときに、ひどい火傷を起こしてしまうからだ。火傷を起こすことを、ネズミ魚は、あの変形術を施され、運河に飛び込んだときに、察知していた。

漁船は静まりかえっていた。一人の漁師が、船の先に出て、ネズミ魚の、独特の光に気付いたらしく、金目のものと決め付けた漁師は、網を放った。難なくネズミ魚は、網に絡まり、捕らえられてしまった。「おい、この魚変じゃないか？きらきら光って、やけに歯が飛び出している。新種なら俺たちは新聞に出るぞ」

一人の漁師が、ネズミ魚を、片手で、乱暴に摘み上げると、べた記事だろうがな、と言った。ネズミ魚にとって、新聞に載ろうが、どうでもよかった。漁師は、顔をまじまじ見ていると、こいつは、やけに奇妙な顔をしてやがる、と言った。結局は水族館にでも行くんじゃないだろうか、とも言った。

漁船に乗り込んでいる漁師、新米からベテランまで、ネズミ魚を知らなかった。

いずれにしろ、俺は、この漁船から逃れなくてはならない。ここにいる漁師は、少々乱暴な感じがする。しかし、また海に戻ったとしても、ただ彷徨い続けるだけだ。

漁師は、まだネズミ魚を捕まえて、離さないのだから、体中を捻って、逃れようとした。

空は明るく、漁師の鮮やかな青く染まる顔が、判別できた。ネズミ魚は、口から奇妙な声を発した。そうすると、漁師の一人が、フグも鳴くが、こいつも鳴くんだな、と言った。

ネズミ魚は、他の魚とは別に、研究所に送られた。だみ声の競から逃れて、単調なリズムを刻む車の水槽の中で、海水が、ぽちゃぽちゃ音を立てている。

いったい、この運転手たちは、どこへ行こうとしているのだろうか？

研究所の自動ドアのところで、水が、水槽から飛び出して、運転手二人に、降りかかった。二人が、同時に舌打ちをした。

倉庫のようなところには、水槽が数多く並んでおり、照明は暗く、どんな魚がまわりにいるのかが分からなかった。グリーンの照明が、水槽の裏から照らしていた。

二人のうち、一人が、用意された書面に、日付とサインを書いた。そして、海洋学者に報告していた。

海洋学者が、尋ねた。

「どの辺？」

「沖で釣り上げられたそうです」

海洋学者が、話している間に、もう一人が、水槽を軽く爪先ではじいた。海洋学者は、それを注意した。

父が、片目を失った後、トイレで用を足すにしても、よく便器の周りに引っ掛けて、便器を汚していた。そのたびに、母に叱れ、便座に座って、用を足すように言われた。食事の時も、箸先が、トンカツの手前を、うろちょろしていたかと思うと、トンカツを通り越して、箸が迷っていたこともあった。見ていて気の毒だった。

俺が、中学のときに、父は、サングラスをかけずに、目立つ義眼をさらけ出して、授業参観に来た。はっきり言っていやだった。父に、サングラスをかけるように言った。それでも、父は、分かったと言って、数日が過ぎ、外し、また俺から言う、それで、また父は分かったと言う。

母が、浮気をし始めたころになると、父が、サングラスをかけないのは、不満や怒りのためではないかと考えた。それで、あえて義眼でいるのではないか。

そういえば、おれが、こうしているのも……………。

意識がはっきりしてきた。そのとき、解剖刀をかざした海洋学者と目が合った。海洋学者は、既に、鱗を剥ぎ取っていた。それだけでなく、生きたまま、腹を裂く算段なのか。幸い体が動いたので、脊椎を思いっきり動かして、ばねのように飛び跳ね、解剖台の上から逃れた。

床に落ちたとき、両脇腹から、タラコのようなものが、皮膚を突き破って出た。それはイモリの足のようになり、合計四本飛び出し、そのため、歩行が可能となった。

俺は、しばらく歩み始めて、海洋学者は慌てて、取り逃がすまいとして、追いかけた。学者、それも、海の生物を専門としているのなら、ゴンズイやミノカサゴには毒があることくらいは心得ているはずだ。ところがこの学者とやらは、素手で取り押さえようとしているのだ。確かに、俺には、毒がない。武器といえば、このサングラスを噛み砕くくらいの前歯であろう。この前歯であれば、ワニガメと同等の勝負ができる。もちろんこの今おかれている歩行可能な状態であればのことだが。野生動物でも、弱いものは生れ落ちると、すぐに歩行が可能となる。餌食になるからだ。認めたくはないが、どうやら「保護」に値する生物といった位置づけのようだ。そして、恥と幸福感と敗北感が入り混じった気分を背負うように、どうにか、この頼りない、細い、イモリのような足で逃げ出せた。もっとまともで、体裁が良い、あわよくば、周囲に恐怖を抱かせる格好の足とはならないものだろうか。自動ドアが間抜けに試験体を認識することなく左右に広がり、開く。

研究所から、飛び出すと、雨が降り出した。鱗は、学者によって、剥ぎ取られていたため、皮膚はぶよぶよになり、眼球が、その周りを囲む皮膚のやわらかさに耐え切れず少し飛び出し気味になった。そして、草むらに隠れた。嗅覚とやらは、ないのであろうか？全く草の匂いがしない。学者は、今、連絡をとって、探し出すことだろう。いったいなんて言うのであろうか。

俺の体は長く雨に打たれてほとんど溶けかかっている、骨格のみを残すだけとなった。もう時間の問題だろう。その骨格も雨に打ちのめされて砕け、土になるのか、それとも骨格が変化して何かになるのか。

雷が鳴り出した。雨はいっそう激しさを増し、俺の身を打ち付けていく。雨でそうだったのではなかった。骨格は見えない操作で形が変わっていった。まず背骨が伸び始めた。そのためぶよぶよの皮膚は伸びだし、引っ張ったうどんのようなようだった。その次にイモリのような足が伸びだし人間の手になった。栗のように小さな頭部はふくらみ始め、頭蓋骨が赤ん坊のようにまだ軟らかいものの人間の頭部になった。鏡こそないが人間になった。俺は嬉しかった。人間から魚へ、魚から人間に。胎児が進化を、地球上の生物の進化を母体内で再現するというが、考えてみれば、俺は外部で逆行し、そして胎児と同じことを外部で再現しただけなのだ。

Aは俺の高校の同級生で、不登校の男子だ。彼とは入学当初から仲がよかったので、よく自宅に電話があって彼の家に行ったことがあった。彼は生徒会長に立候補して、票数が少なく皆は自分のことを嫌っているのだろうかと、考え始めた。彼の弁舌はうまいとは言いがたかったが、俺の知る限り皆は嫌ってなどいなかった。ただ、同時に立候補した生徒があまりにも奇妙であったため、面白半分に皆はそいつに票を入れたのであった。俺は、そいつには入れなかった。そいつはロバの仮面をかぶって体育館の壇上にあがり、羊の鳴きまねをした。そして冷やかし半分の誰かがそいつにブロックを割るように叫んだ。ブロックはそいつが用意していたため、ロバのそいつは前のめりに歩いて裏手からブロックをもって出てきた。空手などやっていなかった。そいつは壇上の中央にブロックを置き、こぶしを振り上げると思いっきりブロックに打ち付けた。皆は割れるはずなどないと思っていたため、痛がる様子を期待した。案の定ブロックは割れずにこぶしを股間にはさんでそいつはピョンピョン跳ね回った。ロバの仮面をかぶって飛び回った様子を皆は腹を抱えて笑った。

不登校になった友人はそれがきっかけであった。彼は真剣に物事を考えるタイプであった。気障でもなく、気取ってもいなかった。ただ、あのロバの格好をした候補者が生徒会長になったことが彼の意欲を削いでしまった。不登校の友人はそれから俺以外とは連絡をとらなかった。両親がいて、何度か学校に相談していたが、担任が友人にどうにか学校に来るように説得しようとしても電話にも出ず、手紙の返信もしなかった。そうして時間が経ち、担任は彼が傷ついているのは落選したからだ、決めつけた。しかし、本当は回りの生徒を信用できないからだった。担任は友人の見ず知らずの生徒を友人の家にまで行かせて登校するように促した。これは逆効果であり、特にロバの格好をした生徒会長が来たときが契機であり、それで彼はとうとう学校を自主退学した。学問には興味があったらしく、彼は大学検定試験にその後取り組んだ。その当時、彼の家を尋ねると彼は猛勉強をしているところだった。両親は大検に向かって邁進している我が子をはじめのうちは反対した。というのも、学校に通うことで学問以外の対人関係を学んで欲しいと願っていたからだ。それでも彼は、それは大学に行くのだからそれからでも遅くはない、と両親を説得した。確かに彼の猛勉強によって、科目をどんどん取っていった。彼の家に行って紅茶を飲みながら彼から発する話を聞く限り、将来設計がきちんとしていて、学校に行っている時よりも生き生きとしていた。俺は高校に通ってぶらぶらしていたから、彼の話で、少しは将来について、考えなくてはならないとしか思わなかった。彼の熱心さに心を動かされるほどではなかった。もし当時彼の言葉で俺が何かに向かって突き進んでいたら、こうして草陰で人間になってあたふたしていないだろう。しかし、彼はその後挫折した。そして一日中布団の中で胎児のように丸くなって一日を過ごし、夕方から起き出し、夜中住宅街を徘徊し始めた。それから、彼はそんな生活を続け十五年もの間、布団の中で過ごした。彼は言っていた。布団の中だと母体内にいるようだと言っていた。

俺の目は血走っていた。これからどうにか居所を確保しなくてはならないし、それに鏡が必要だ。一銭もない。鏡を見たいというのは、六十の初老の兵士の顔が気がかりであったからだ。

裸ではあるが、心配はない誰かいい鴨がいれば襲って身包みはがせば、それで服を調達できる。どうでもよかった。何しろ人間になれたのであるから。これからどうするかが問題だ。あの八百屋の言いつけどおりに従って、とんだ目に遭った。ネズミ魚に変化したのはあの倉庫の中で女に変形術を施されたからだ。大体人間が魚に変化することが考えてみれば荒唐無稽ではないか。魚になってしまい、俺は今までの人生の終止符を打ったような気がした。今度こそ生まれ変わり、人生をやり直すのだ。こうして草陰に隠れて雨に打たれてこれからの行動を考えている最中に、今までのあの団地に侵入してからの出来事、自分の身に降りかかってきたことを回想する。確かにだらしない生活を送りつけ、あの糖尿病の住人の部屋に侵入してからというものの自分の行き場を失った。このことは何かの合図、印なのかもしれない。八百屋



は魚に自分になる前に卒業しなくてはならないことをほのめかした。そのことは俺が一番知っているが、アルコールに溺れるようになってからというもののどうにでもなれという自棄を起こしてしまっていた。せっかく人間になれたのだから——人間の知能を持ち、体に変化し魚になってしまってからというものの人間の格好をすることがどんなにありがたいことかを身にしみていた——アルコールに溺れることなく鮮明な意識の中で新たな生活を送ることを自分に誓うことになる。

雨に長い間打たれていたからか体が、かなり冷えてしまっていた。夜になるまで待つことにした。夜になれば追いはぎをしたところで顔はわからないだろうし、それに逃げおおせば俺は捕まらない。捕まらない……服を調達することで被害者は丸裸だ。しかし、服を剥ぎ取られた被害者はどうなるのだろうか。いや、ここまで思考を進めていき、被害者へ気を配ることは、進歩かもしれない。魚になったことが俺の性格を少しでも変えたことは、良い兆しだ。このことで全く違った人間になることになれば、もう団地に侵入して悪さをすることなどしないだろう。八百屋の言う、卒業をしたことになるのだろう。油断はいけない、追いはぎを少しでも考えたことはまだまだ昔の反社会的な考えが自分の心に居座っていることを示している。住所不定、無職。何の仕事でもいい、とにかく仕事を見つけて生活をやり直そう。もう魚はこりごりだ。皮膚が沁みる。これはおそらく、海洋学者が鱗を削ったことと関係があるのであろう。あの海洋学者はサディスティックだ。研究とは程遠い。あれでは魚屋さんと変わりがない。

雨は次第に勢いを増していき、人の往来は草陰から見る限り全くない。研究所の蛍光灯の光が雨に滲んでいた。裸でなかったら、雨宿りをしてもかまわないであろう。まさか、陰部にイチジクの葉をあてがって、研究所に行くわけにはいかない。タバコもない、服もない。タバコが吸いたい。ここから一目散に逃げ出したい。雨で、それも土砂降りなのだから。傘で濡れないように人々は前かがみになって他の人を見るゆとりもない。裸で歩き回ったとしてもそれを咎めたり、驚くことはないだろう。雨は、人々の足を荒縄で縛り付け、行き先に少しでも速く、辿り着くことだけを、考えさせる。その雨が好きだ。

草陰からずぶ濡れになって通りを眺めている。一人、犬を連れた男が通った。それから、しばらく経って赤い傘をさした若い女が通った。それからは誰も通らない。今が機会だ。どうにか居所を探そう。勇気を振り絞って一步踏み出した。

通りは静まり返っていて、白い光できれいだった。まるでこれから人生をうまくやっていけることを暗示している、歓迎しているかのようであった。嬉しいではないか、これまで排除されつづけてきたのが、今ではこの世が祝福してくれている気がする。これは気のせいかもしれないが、人間となって今では何もかもがうまくいくようだ。大通りに出なくてはならない。

ストリーキングは人々を遠ざける。別に襲って強姦するわけではない、ストリーキングはあくまで内側に向かっていく、一種の露出狂だ。内部には二人の人物が想定される。女と男だ。自分の中で女と男が交互に会話をする。そして親密になり、体を許す、そこから徐々にエスカレートして行き内部では抱き合い、セックスをする。自分の裸を見て人が驚くことを期待しているわけでもなく、また、裸になり、人に見られることで、性的興奮を得ているわけではない。これは、内部で想定した理想の女との関係なのだ。

男は雨の中で、必死にどうすれば服を調達できるだろうか思案していた。服を調達するにはこの激しい雨の中で何もかもが霞んでいる時がいいだろう。

通りを勘を頼りに歩き出す。とりあえず人ごみにまぎれるか、この殺風景な町で服を探るか迷ってしまう。どうしたらいいか。どちらにしる、現金は冷凍倉庫にある。

歩き続けるうちに、住宅街に入り込んでしまった。みな立派な家ばかりだ。駐車場には、ワーゲン、BMW、ベンツ、国産にいたっては政治家が乗るようなものがあった。そのとき雨は更に激しさを増し、男はペニスに雨粒が強くあたり、それが刺激となって、どこか手ごろな家はないだろうかと思い始めた…

あの女はきれいだが、何かしら毒気があった。ポン引きについて行き、はじめて女と交渉をすることになったある熱帯夜のときだ。女は薄明かりのもとで体を何か爬虫類を思い起こさせる動きをしていた。熱気で俺はおかしかったのだろう、ポン引きについていくなんて。下着姿で女は誘ってきた。交渉にしてはもう少し大胆であったほうが興奮したが、その女は自分を相当な価値のある女のように自分では思っていたらしい。ポン引きは入口までしかいなかったがモニターで観察でもしていたのだろうか？いやな経験であった。女はうんともすんとも言わず、俺は惨めに果てた。嬉しさも何もなかった。キスすら許されなかった。それに大半は俺を弄んだくらいがあったのだ。女の中でオレは動いたのではなく、女の手でオレはうごめいたのであった。馬鹿なことをしたと思った。帰り際にポン引きにチップを渡して…と女が言ったので千円渡した…ポン引きは薄笑いをして歯がカチカチと鳴った。それ以来、俺は歯軋りを嫌うようになった。

意識ははっきりしている、だが体がうまいこと動かないのが難点だ。これはおそらく魚になって浮力の世界にいたからだろう。住宅街はどの家からも音が聞こえなかった。ただ一軒ピアノの音が聞こえてきた。その音楽は男の分野ではなかったから、流れるような旋律が男の演歌のリズムとかけ離れていたものの、きれいな音楽だと感心した。急に、後ろから、小さい女の声がした。

「ショパンと雨が関連すると寂しくなるの…」

振り返ると、そこに女がレインコートを着てたたずんで男に話し掛けた。

「私、いつかは露出狂の人に合えるって気がした…でもやはり目の前にすると…ね…私も変だけど、…こんなこと初対面の人に話すと変ね…このピアノの曲知っているかしら？」

「ショパンを聞くと寂しくなるって言っていた…」男は陰部を手で覆い、雨の中で情けない格好で、搾り出すように呟いた。

「残念ね、あの子はショパンはまだ無理なの…でもいつかはショパンを弾くようになるわ…この曲クラシックじゃないのよ…外国の曲…雨にうってつけね…私この曲何度聞いたかしら…雨になると露出狂の人に会えないかっていう気持ちといつかはショパンを弾くことを期待してこの曲に浸っているの…あなたはどんな曲を聞くの？」

「演歌だ…」と言ってみたものの、この格好では犬が腹を出して降参しているようでもあり、騎乗位で女に相手をしてもらっているようだ。レインコートの女は語尾を弱める独特の発音だ。

「私、演歌きらいなの…ごめんなさい…こんなこと言って…ショパンが…もういいわ…それよりも私の家に来てシャワーを浴びるといいわ…さあ」と女は無防備にも後姿を見せてゆっくりと歩み始めた。

女は時折振り返り、含み笑いをする。上目遣いで子供にでも接しているかのようだ。彼女のレインコートは淡いブルーだった。レインコートから脹脛が見える。その脹脛から踵にかけては、とてもきれいな形だった。

「何考えてるの…？」と女が爪で弾くように尋ねた。

「裸でみっともない」

「もうじき着くわ、スウェット貸すから…」

オキアミ歯科医院という看板のところまで女は立ち止まった。そして、間口の狭い古びたドアを鍵を回して開けた。待合室は狭く、椅子は埃をかぶっていた。女は診察室に入ってすぐに休診札とバスタオルを持って出てきた。

「これで体を拭いて…この休診札を入口にかけておいて…どうせ…来ないから」右下を見て、視線を合わせないようにして言った。そして、自分はレインコートを待合室で脱いで、風通しをよくするためか待合室の窓を開けた。

男は、休診札をかけ、バスタオルで全身を拭いた。男の視線は、依然として、女の脹脛に集中していた。女は体の線を強調する、ぴったりとしたスーツを着ていて、色は白であった。目は大きく、眉毛は細かった。唇はピンク色をしていたが、待合室の窓から差し込む夕暮れ間じかの白い光からして、はっきりしたことは言えない。彼女の顔からは疲労感は見えない。そして、拭き終わると、診察室を通り、女の自宅に上がりこんだ。

古風な家であり、彼女の話からして彼女の父親から歯科医をやっており、彼女も歯科大学を出てしばらくの間歯科医をしていたようだ。その話をしてすぐに風呂場に案内され、男は熱いシャワーを浴びた。

その間に、女はテーブルに熱い緑茶を入れ、エアコンをつけた。女の髪はショートカットで、湿気で少し勢いがなかった。普段はもっとボリュームがあるのだろう。小さな顔をしていて、色白であった。男がシャワーを浴び、出てくると父親の下着だけど…とあって差し出した。

「親父さんはどこにいるんだい？」と、男は英語で創業1956年とロゴの入ったネイビーのスウェットスーツを着て、親父がいるなら早いとこ女にこの服を貸してもらって出なくてはいけないと思って尋ねた。「もう死んだわ…このお茶あまり美味しくないけど…美味しいお茶切らせちゃって…体温まるわ」

それ以外家族のことは言わなかった。だから男は母親のことも聞かず、この女に子供がいるか、亭主がいるかとも聞かなかった。家に裸の男を上げるくらいなのだから、亭主はいないのだろう、と少しよい方向に考えていた。

「そのスウェットきつくない、大きくない、大丈夫？」と心配そうに聞いて、「父親のものなの…」と云った。

そして、女はしばらく男を見ていた。男はお茶をすすると、「なぜそんなにじろじろ見るんだ」と責めるわけでもなく、静かに問い掛けた。

女は自分のお茶を、湯呑に入れながら、呟くように、不鮮明に言った。「ねえ、露出狂の人って、頭の中にはどんな考えとか思いがあるの？わたしとても不思議なの」「俺は言うておくけど、露出狂じゃないんだ」「でも裸でしょ、さっき…」と女ははにかんで言った。「説明するには時間がかかるが一つずつ説明しようか？嫌？…時間もかかるし、やめにしておこうか」「不思議だから、説明して」

女はお茶を少し飲んで、また上目遣いをした。「信じないだろうけど、俺は魚になったんだ、そして研究所で解剖されそうにもなって、脱出した…そして人間に変わって…変な話だろ？魚になったんだ、服はないさ。だから裸だよ…もっと詳しく説明すると、君は飽きるだろう、だから今のだけで十分だと思う、家に上げてもらって悪いんだけど、お腹がすごく空いているんだ、何か食べるものを用意してくれるか？こう馴れ馴れしく言うのも問題かもしれないが、何でもいいんだ」男の腹が少し、鳴った。

「バナナがあるわ、昨日ひとふさ買ったの、美味しかった…甘くって…」と、女は言う。と冷蔵庫前の白いビニール袋から取り出して、ひとふさテーブルに置いた、そしてお腹いっぱい食べるといいわ、と言った。

「…オサカナになったの？でも、人間がお魚になるって、変じゃない？冗談でしょ？」

「だから、信じないだろうけど、って言ったろ？別に信じなくてもかまわないさ、ただ質問されて、露出狂だ、って言われたから答えたまでさ」

男は、べつだん感情に起伏はなく答えた。

「それより、不思議なのは君が一人だか何人だか知らないが、ここにいる、雨の日に露出狂の人に会うために出かけるほうが、知りたいね」

「本を読んだのよ、まじめな本じゃなくて、露出狂の人の心境を書いたノンフィクション…あまり売れなかったみたい、その人はそれで快樂を得ていた…ってというのが大筋…話題にもなかったし、本屋さんにもそれからしばらくして行ったんだけど、もうなかったわ…」女は湯呑みを覗き込んで、茶葉をつまんで布巾に擦りつけた。彼女の爪は艶をつけた長めの爪だ。

「それで、その本を読んで露出狂に興味を持ったんだ…怖くなかったのか？俺の考えでは露出狂の人間は自分の世界を持っていて対象には興味はないんだ、自己の中に理想の女がいて、そいつがもっぱら相手さ…」

こう言って、彼女がどんな考えを持つか耳の感度を上げて聞こうとした。しかし、女はただ聞いて、湯呑みを覗き込んでいるだけであった。女は、ため息を一つついて、別の話題に切り替えた。

「この歯医者、もう廃業寸前、昨日も患者さん来なかったの…父の代から続く歯医者なんだけど…この辺なんか、お金持ちが多いでしょ…だから、古びた設備の歯医者で治そうとはしないのよ…たいていはこの町で探さないで、どっかに行っちゃうの…」彼女は診察室があると思われる方向にゆっくり顔を向けた。そして、茶を一口飲み、不鮮明な小さな声で、「…それで…」と言ってそれをテーブルに置いた。

「父のあとを継いで、歯科大にも行って診察をしたの、でもどうしても患者さんが寄り付かないの…どう思う、変だからかしら…それとも治療方法が古いからかしら？」

「さっぱり分からないね、歯医者はどうも苦手さ、歯医者に行くと、きれいにしてくれるから好き、っていう人もいるけど、どうも理解できない、今も虫歯があるんだ、あまりひどくないから放っておくけど、そんなことより、変って言うけどどんなところが変なんだい？」

女はしばらく黙っていた。そして、言葉が聞き取れない小さな独り言を言って、それは雨音でかき消され、何を言っているのか分からない。どう見ても露出狂に興味を持つことと、歯医者にしては不釣合いの長い爪、それと語尾を濁す発音、これくらいしか彼女の変わったところは見当たらない。

今いる応接間か食堂か知らないが、ここはきちんと整理されており、食器棚には空かすかで、はだしの足の裏には、米粒や埃の類は付着してこないから、一人暮らしにしてはきちんとしていることが分かる。俺の部屋は掃除などしないから綿埃で汚れている。団地の住人にしてもこの女にしても常に部屋というものを清潔にしておく、ゆとりや、気力がなぜあるのだと思った。忙しくて不衛生にしておくのではなく、忙しくても掃除の時間を作って清潔にしておくのだろうか。どうして、そうも清潔にするのかが、分からない。人が来るからだろうか？それともその人の性格からだろうか？

俺は小学校の筆入れを思い出した。人はみな鉛筆をきれいに削って、消しゴムも黒ずんだところをおそらく指でこすって、きれいにしていた。しかし、俺のは鉛筆の先は丸まって、消しゴムなどにいたっては齧ってぼろぼろになっていた。清潔好きも度を越せば病気だ。むろん埃まみれになって酒相手に一日中悶々と過ごすのも病気だろうが…。

漫画クラブが学生時代にありそこに誘われてしばらくいたことがあった。少人数でみな世に出ている漫画の模倣をしていた。皆うまいと思っていた。俺だけがそのクラブで砂漠の中で徘徊している男の絵だとか、墜落していく人の絵などを描いていた。学芸会でクラブの絵が貼り出されたときに、俺の絵にいたずら書きをしているのを見つけてそいつを殴ったことがあった。そいつは人が墜落して行く絵に和式の便器を書き足していた。その墜落していく人を自分に見立てたつもりはなかったが、便器を書き足したことで、なんだか自分が便のように思えてきて不快になって殴ったのだった。そいつは顔を押しさえながら苦笑いを残して走り去った。

「ねえ、何考えてるの？私のこと？歯医者のこと？」

女は子供っぽい表情で尋ねた。

「昔のことだよ、くだらない昔のことさ、もう忘れたことだ…」

「もうバナナ食べないの？食べるから、もう一本食べない？」

女はバナナを房からもぎ取った。そして、皮を剥いて、口に入れ、齧った。

「さっき変だっていたけど、なんか癖でもあるのか？」

女はバナナを口から離ししばらく齧歯目の動物のように咀嚼して、小さな声で聞き返してきた。

「癖？」

「そうだ、癖だよ、誰にでもある。その癖がきみの足を引っ張っているのかもしれない。患者が寄り付かないのはその癖にあるのかもしれない。無くて七癖っていうだろう。俺は酒で台無しだ。これは習慣と言えるかもしれないけど」

「お酒飲む？」

「なんかあるのか？腹ごしらえさせてもらって、その上、酒とは凶々しいけど、できたらでいい」

女は立ち上がり、残りのバナナをテーブルの上において、男はしばらく中身が半分の萎びたバナナを眺めて静かな場所だここはと思いつつ、診察室のある方向に目をもっていった。

「なんか父みたい…お酒をそのスウェットを着て飲もうとするんだもん…ビールならあるわ…おつまみをなんか…こしらえてと…」と、女はやけに元気になったようだ。

女が台所に向かうときも、俺は彼女の完全な脹脛を感心して見ていた。顔もそんなまずくはない、それに心配りもそう悪くない。ただ、なぜ部屋着に替えないのか？苦しくないのだろうか。警戒心がそうさせているのかもしれない。

彼女のようにたとえ露出狂に興味を抱いたとしても、その露出狂の男を自宅に上げて、腹ごしらえをさせて、その上酒を出すとは考えられない。酒をだして襲ったりしたら彼女はどう対応するのだろうか。他の男もいない、なんか格闘技でもしているのだろうか。落ち着いて、安心しているように見えていて…やはり、あの白いスーツが気になる。やはり、適当な距離を置いているのだろう。歯医者をしていたことがあったというくらいだ、距離の置きかたは心得ているはずだ。だが、歯医者は何か他の医者と異なっていて、口腔という恥部に似たような人間の場所相手だ。考えようによっては口というものは他のどんな器官よりも狡猾にできている。何を口に含もうと歯を掃除することで一からやり直せる。他の器官…たとえば耳でも一からやり直せるだろうが、耳は音をつかむためだ。音には匂いも味もない。口は複雑だ。人を裏切る器官かもしれない。それが歯医者の相手だ。そんな器官相手で一日を過ごしていると、露出狂に興味を抱く理由も分からなくはない。彼女は本が影響したというが、職業柄そうした宿命のような気もする。



「よくね、父が炒めたしし唐を、塩コショウをしたのをつまみにして、それから…えーっと、そう、冷奴にネギの刻んだのをのせて、それをつまみにして、お酒を飲んでいたわ。しし唐きらい？」

「きらいじゃない、俺はだいたい缶詰だよ、いわしとか、さんまとか、だらしない人間だから、手抜きしてしまうんだ、部屋だって、きみの家のようにきちんとしていないんだ。見たところ清潔にしてるな。潔癖症か？」と、少し彼女の変なところを聞き出そうとしてみた。

「潔癖症だと…歯医者できないでしょ…」

「ゴムの手袋で防御する」

「今まで素手でしてきたの…」

患者の唾液で光る女の指を想像した。

女は、包丁をおいて、男に静かに近づいていき、耳元でわたし…と呟いた。男は話題を変えようとした。「とても綺麗な手をしている、素手だ」

女は顔を寄せてきた。男が手を差し出して女の手をつかんだ。そして引き寄せ、手にキスをした。女は渴いた口を唾液で湿らせて、ささやいた。

「やっぱり、…変でしょ…見ず知らずで、会って間もないのに…変でしょ…だから…」

「廃業寸前…」

「そうかも…」

「それは仕方のないことだと思う」

女が台所に向かって立ち去った。それからはあまり会話をしなかった。女は、はねた油を怖がって、あっつ、あっつ、と喋りながら戯れているかのような陳腐な料理風景を男はじっと頭に浮かべていた。料理ができあがると、女は、先ほど見せた表情を見せなかった。男はそれを別段悔やんだりしなかった。女は食器棚からグラスを二つ持ってテーブルについた。そして、男が、箸を…と言うと、用意をし、ビールを女が注いで、男が女に注いだ。

一瞬、男の脳裏にこの家の庭で草刈をしている姿が浮かんだ。

「この前見たビデオで面白かったのは、南米の映画で、題名は忘れた…というよりも、いきなりはじまって、見るからにおかしな映画だったわ…東洋人が下水道に入り込んでそこからどうにか抜け出すんだけど…ボブカットの太っちょがやたらに強くて、その東洋人を退治してヒーローになったり、麻薬の取引、警察を夢見る少年、年上の女性との話、…錯乱した内容だった」とアルコールが回ってきたのだろうか、語尾の不鮮明さがだいぶ改善されていた。

「最後が、太っちょが豚にひかれるの。本当よ、多くの豚が道路を移動するの、象くらいの大きな豚。それで踏みつぶされて死んじゃうの。本当にあんな豚いるのかな。豚を養殖している人が、死んだ太っちょのお墓に向かっていくときに、手にした新聞紙にくるんだサラミがアップになって、終わるの」

「監督は誰？」

「それが変なのよ。クレジット自体がないの」

「スナッフフィルムだと出なかつたりするんだよ、それにしても変だね、きみの話を聞いていると、ストーリーもあるし、結末は粗末でもあるし、ほんとにそんなビデオあるの？」

「そこが駄目なのよ、そのビデオ置いていないの、つぎ行った人が返さなかったのか、店で処分したかのいづれかね、昔、欲しかったテープがあって、その頃はダビングをビデオ屋さんでやってくれたから、頼んだの、そうして一週間待って店に行って訊いてみると、借りた客が返さないって言うの、親切なおじさんだったから、レーザーディスクをわざわざ取り寄せてダビングしてくれた……」そういうと、彼女は紅潮した。男はそれに反応しなかった。

「おれはあまり映画は見ないね、疲れちゃうんだ。映画館も行ってもうだいぶ経つよ」

「家ではいつも何してるの？」

「ごろごろして、テレビを見て、酒を夜になるとあおって、居酒屋に行ったり、立ち飲みに行ったり、とつまらないものさ、一日無駄にしているんだ」

—ねずみ魚 (中) へつづく—